様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５０９

研究課題名（和文）「とびはね音調」の実態とその機能の解明

研究課題名（英文）Inquiry into the Structure and Functions of the Tobihane Intonation

研究代表者
田中　ゆかり（TANAKA, Yukari）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：４０３０５５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：首都圏において近年広まった新しい音調である「とびはね音調」の実態とその機能の一端を明かにした。従来、文末音調はアクセントに干渉しないとされてきたが、本音調はアクセントに干渉し、その下降を無効化することによって「同意求め」機能を獲得している。伝統的な上昇調の衰退に伴い、本音調は「問いかけ」機能も併せ持つようになりつつある。さらには、首都圏若年層を中心に、文末上昇を伴わないアクセント下降無効化のみによる「同意求め」機能をもつタイプが新たに広まりつつあることも確認した。全国でも本音調は、若年層に広く受容されつつあるが、地域的由来が「東京」であることによって、近畿では受容に否定的であることもわかった。

研究成果の概要（英文）：This grant was used to examine the" tobihane intonation", a new pattern of intonation that has spread through the Tokyo metropolitan area in recent years. Though it is generally believed that intonation does not override pitch accent, this pattern consists of rising sentence-final intonation along with a nullification of conventional drops in accent. Though this pattern functions primarily to solicit agreement, with the decline of the rising intonation associated with the standard interrogative, it has begun to take on an interrogative function as well. Meanwhile, among younger speakers in the Tokyo area, there has emerged yet another pattern that consists only of a nullification of drops in pitch accent without rising intonation, with an exclusive function of soliciting agreement. Finally, this research has shown that the tobihane intonation is spreading among young people throughout Japan, but, due to its geographic association with Tokyo, has met with resistance in the Kinki region.

研究分野：日本語学

キーワード：とびはね音調　同意求め　問いかけ　アクセント下降の無効化　上昇調　首都圏　東京　近畿

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、1990 年代以降首都圏を中心に拡張している新しい音調「とびはね音調」の音調実態とその機能を多角的観点から明らかにしようとしたものである。

音調と機能の対応については、従来、音調研究者と文法研究者において独立に進められてきたものが多い。

本研究では、「とびはね音調」について音調研究者（代表：田中ゆかり）と、音調研究に関心を寄せる文法研究者（研究分担者：高木千恵）との協同的研究による成果を目指す。将来の課題として、研究領域を越えた協同研的研究に基づいた音調と機能の対応の記述についての新しい地平を目指した。

2 年度目には研究推進力の向上のため、首都圏東部域音調研究を専門とする林直樹を研究協力者から分担者に変更した。

２．研究の目的

本研究期間に達成を目指したものは、以下の通りである。( ) 内は担当者名。

(1)音響的分析的手法を用いた「とびはね音調」の客観的な音調実態の解明（田中・林）

(2)文法研究者との協同的研究に基づく音調と機能にかんする調査方法の開発（田中・林・高木）

(3)「とびはね音調」の機能と、音調成立由来ならびに地域的由来の解明（田中・林）

(4)「とびはね音調」の受容実態の解明（首都圏方言域ならびに近畿方言域）（田中・林・高木）

３．研究の方法

本研究は、以下の(a)～(e)の５つの方法に基づき研究を進展させた。

(a)文法研究の文脈における「同意求め」に関連する成果の収集と分析、ならびに音調研究への取れ入れ方の検討

(b)首都圏における対面式フィールド調査

(c)首都圏における対面式聞き取りアンケート調査

(d)(c)を発展させた全国規模の聞き取りアンケート調査

(e)(b)(c)を web、とりわけスマートフォンを用いた調査にカスタマイズしたスマホ調査「ことばの発音調査サイト」の構築とテスト調査

なお、(d)については、以下共同研究の一環でもある。

国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫)」

４．研究成果

本研究課題の成果は大きく以下の３点にまとめられる。( ) 内は担当者名。←は２の目的(1)～(4)、３の方法(a)～(e)との対応関係を示す。

①対面調査による首都圏における「とびはね音調」と関連事象の実態の把握（田中・林）
←目的(1)(2)(3)、方法(b)(c)

②全国規模で実施した聞き取りアンケート調査に基づく「とびはね音調」受容にかんする実態と意識の把握（田中・林）
←目的(2)(3)(4)、方法(d)

③文法研究と音調研究の融合によるシミュレーション式調査を取れ入れたスマホ調査サイト「ことばの発音調サイト」の構築とそのテスト調査（田中・林・高木）
←目的(2)(3)(4)、方法(a)(b)(c)(d)(e)

本研究課題に関連する具体的成果物としては、５に示す通り、雑誌論文など 13 件、学会発表 15 件、図書 3 件（予定 1 件含む)、その他 1 件である。

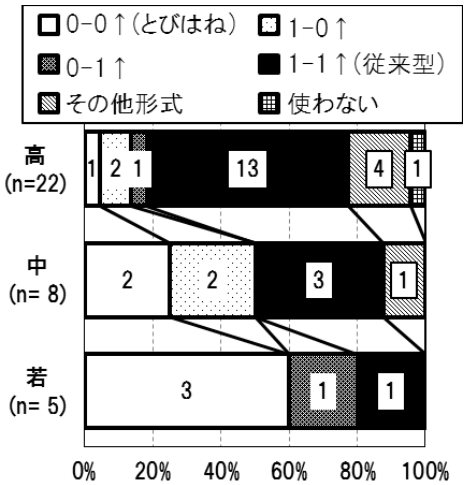
研究組織に属する 3 人がそれぞれの分担に即して実績を形成したといえる。なお、成果③については音調とその機能についての専門家である郡史郎氏（大阪大学大学院教授）にアドバイスを頂戴した。英語による成果公開全般に際してはトーマス・ガウバッツ氏（コロンビア大学大学院博士候補生・早稲田大学交換研究員）に翻訳にかんする専門的アドバイスを頂戴した。

以下、成果①～③についてその概要を報告する。

①首都圏における「とびはね音調」と関連事象の実態把握概要

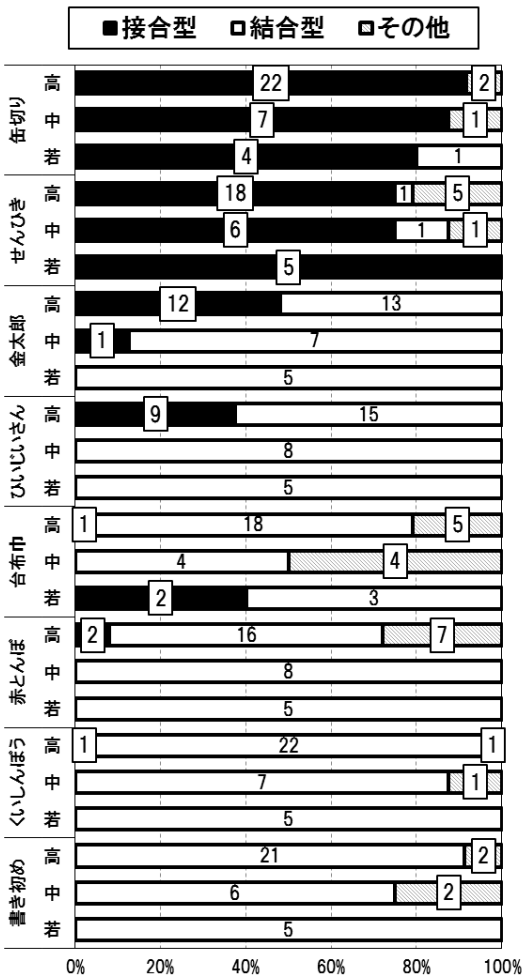
首都圏外周部に位置する埼玉県秩父市におけるフィールド調査において、「とびはね音調」と関連事情について調査・分析したところ、以下のような結果を得た。

(1)「とびはね音調」の受容は若年層に限られ、かつその受容程度は首都圏中心部より少ない。中年層以上ではほとんど受容が見られず、首都圏中心部で衰退した伝統的上昇調が主流であった。よって秩父市調査においては「問いかけ」と「同意求め」の音調による分化は認められなかった（図①1)。



図①1.「とびはね音調」の年層による出現状況

(2)伝統的な東京アクセントである複合語アクセントの接合型は、名詞・動詞ともに高年層ほどよく保存しており、新規事象である「とびはね音調」の受容程度とは対照的な様相であった（図①2）。



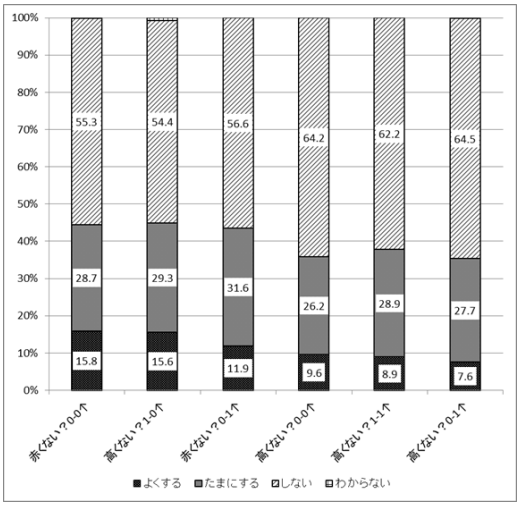
図①2. 複合語名詞アクセント接合型・結合型等の年層による出現状況

(3)若年層においても首都圏中心部では生じているアクセントの無効化に関連した事象の受容は進んでおらず、「とびはね音調」は独立した文末音調として受容されるのではなく、アクセント変化ならびにアクセント無効化現象と連動するものであることが強く示唆された。首都圏中心部で新たに広まりつつある「アクセント無効化」が「同意求め」の機能を示す現象は、秩父調査では認められなかった。

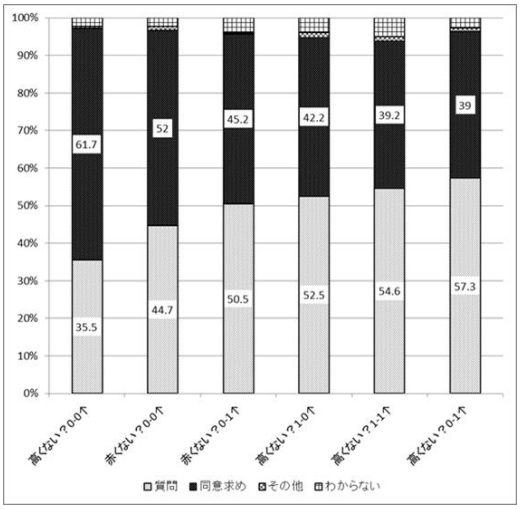
②全国聞き取りアンケート調査概要

「とびはね音調」と関連事象を中心とした全国聞き取りアンケート調査を 2012 年 10 月に実施した。47 都道府県に 10 年以上の居住経験をもつ生え抜き・準生え抜きレベルの 20-30 代（若年層）・40-50 代（中年層）・60 代以上（高年層）の 3 つの年層ごとに男女 2 人ずつ計 564 人から回答を得た。各年層・男女はそれぞれ 94 人ずつ。

調査結果から、「とびはね音調」は、全国平均では４割弱が「する」、６割弱が「聞く」と回答し（図②1「高くない 0-0↑」）、意味については６割強が「同意求め」として受容していることがわかった（図②1「高くない 0-0↑」の「同意求め」）。



図②1. 音調に対する使用意識（全国平均）



図②2. 音調と機能の対応関係意識（全国平均）

また、この音調から想起されるイメージ語として、「東京」「都会」が広く共有されている一方で、地域によって想起されるイメージが相当異なることなどもわかった。想起されるイメージの選択傾向に従い、地域をまとめたものが以下の（ｉ）～（ｖ）である。近畿における「嫌い」選択率の高さは顕著である。

（ｉ）東北・甲信越：「若者」（甲信越）、「都会」（東北）、「好き」（東北）
（ii）北海道・北関東・首都圏：「田舎」（北関東・首都圏）、「かっこ悪い」（北海道・首都圏・北関東）、「好き」（首都圏）
（iii）近畿：「東京」「嫌い」
（iii’）四国：「東京」「都会」
（iv）九州：「都会」
（ｖ）　沖縄：「都会」、「好き」

以上の結果は、この音調がすでに東京発の「同意求め」の音調として、かなりの程度全国的に受容されていることを示していると

みていいだろう。ただし、提示した「とびはね音調」の刺激音声を、当該地方言由来の別の音調と聞き取った回答も含まれた結果であることは否定できない。このあたりは、聞き取りアンケート調査という手法に基づくデータの限界といえる。

「とびはね音調」の受けとめ方については、使用・聞く程度、想起されるイメージ語いずれの側面においても、地域・年層による大きな差があることが確認できた。「とびはね音調」において認められた地域差については、「東京発の新しい言語形式」をそれぞれの地域ではどのように評価・受容するのか、ということの一端を示すものとも考えられる。

「とびはね音調」のような「東京発の新しい言語形式」の全国各地における受容については、従来、若者ことばを中心とした語彙の拡散にかんする研究は数多くなされてきたが、音調形式については、まだあまり例がないように思える。

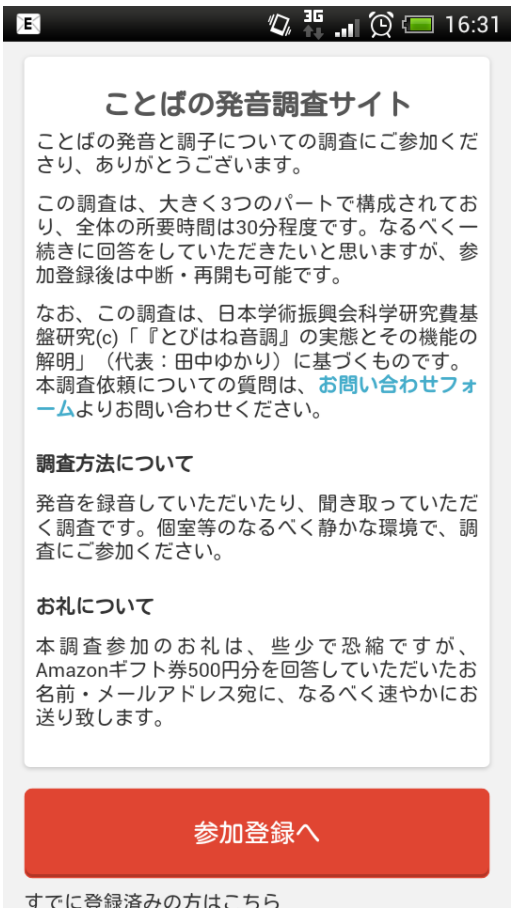
本調査データのさらなる吟味と併せて、このような新しい研究課題にどのように取り組んでいくのか、ということも今後の課題としたい。「とびはね音調」と当該地方言由来の音調との関係については、別途臨地調査などを実施し、本調査によって得られたデータの意味を検証していきたいと考えている。

なお、成果②については、国立国語研究所基幹型共同研究「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（プロジェクトリーダー：相澤正夫）」の一環でもある。

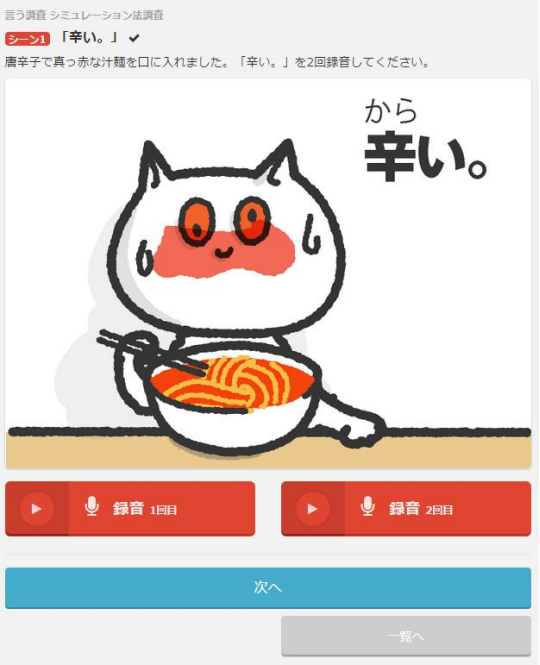
③「ことばの発音調査サイト」概要

本サイトは、従来の対面式調査と聞き取りアンケート調査をスマートフォンによって全国どこでも、好きなときに行えるよう、構築した Web 調査サイトである。Web 上で調査を行う際に問題となるセキュリティーにも配慮しており、調査協力者は、まず調査許諾画面でユーザー登録をし、個別に ID・パスワードを発行した上で調査本体に進むため、他者のデータと紛れることや、代理で調査を行うことがなくなる（③図 1）。また、調査謝礼もサイト経由で送信する。収集したデータの管理については、ID・パスワード付の管理画面によって行うため、何重にもセキュリティー面の配慮をしていることになる。

本サイトの構成は、「言う調査」「聞く調査」「言語意識調査」の大きく 3 パートで構成されている。「言う調査」は、文法研究と音調研究の融合に基づくシミュレーション法を採用し、非対面でも適切な画像と指示文を提示し、スマートフォンのマイクに発話することによって、コンテクスト依存の強い音調調査でも、非対面で行うことを可能にした（図③2）。



図③1：調査登録画面



図③2：「言う調査」画面

「聞く調査」は音声をスマートフォンのスピーカーから流し、その音声の意味を選択するものである。この調査も、非対面では音声の提示や回答までの説明方法を統一することが難しかったが、スマートフォンのスピーカーを用い、適切な指示文を提示することにより実現された（③図 3）。

図③3：「聞く調査」画面

「言語意識調査」はラジオボタン式の調査になっており、スマートフォンでも簡単に回答し、確認することができる（③図 4）。

図③4：「言語意識調査」画面

本研究課題研究期間において、調査サイトの完成と首都圏大学生を対象としたテスト調査を完了した。

今後は、スマホユーザーである大学生を中心に広域調査を順次実施し、さらなる研究の進展を図りたい。同時に、今後の研究課題の抽出などを行い、新たなステップとしたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

① 林　直樹、「あいまい性」を捉えるための音響的指標の検討と分析データの構築―首都圏東部域を中心として―、語文、査読あり、150 輯、2014、168-150
② 田中　ゆかり、ヴァーチャル方言の３用法―「打ちことば」を例として―、話し言葉と書き言葉の接点、依頼原稿、2014、37-55
③ 田中　ゆかり、方言とコミュニケーション：「ヴァーチャル方言」とその効能、α-Synodos、依頼原稿、155、2014、http://synodos.jp/
④ 田中　ゆかり、特集１　“地元”意識を考える「方言」が価値をもつ時代―Stigma から Prestige、そして…―、都市問題、依頼原稿、105 巻 8 号、2014、9-17
⑤ 田中　ゆかり、林　直樹、ネット系若者ことばの地域差とその背景―首都圏・関西・広島の大学に通う学生とその親に対するアンケート調査から―、語文、査読あり、2013、左 20-50
⑥ 田中　ゆかり、林　直樹、首都圏周辺部における新しい音調の受容パターン―「とびはね音調」と複合語アクセント―、論集、査読なし、Ⅸ、2013、17-30
⑦ 田中　ゆかり、社会調査のあれこれ「聞き取りアンケート」という方法、社会と調査、依頼原稿、11 号、2013、149
⑧ 田中　ゆかり、「とびはね音調」はどのように受けとめられているか―2012 年全国聞き取りアンケート調査から―、現代日本語の動態研究、査読なし、2013、211-235
⑨ 田中　ゆかり、前田　忠彦、方言と共通語に対する意識からみた話者の類型―地域の分類と年代による違い―、現代日本語の動態研究、査読なし、2013、194-210
⑩ 田中　ゆかり、「方言」の受けとめかたの移り変わり―全国方言意識調査からみる年齢差・地域差―、日本語学、依頼原稿、第 31 巻第 11 号、2012、16-27
⑪ 田中　ゆかり、前田　忠彦、話者分類に基づく地域類型化の試み―全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討―、国立国語研究所論集、査読あり、第 3 号、2012、117-142
⑫ 林　直樹、東京東北部アクセントの分類とその変化プロセス－クラスター分析を用いた話者分類結果から－、計量国語学、査読あり、28 巻 7 号、2012、233-249
⑬ 林　直樹、東京東北部のアクセント－2 拍名詞における音調実態と年層差・地域差－、日本語の研究、査読あり、8 巻 2 号、2012、15-30

〔学会発表〕（計 15 件）

① 林　直樹、首都圏東部域アクセントのあいまい性・特殊性―音響的特徴を用いた試行―、日本音声学会第 329 回研究例会、2014 年 6 月 18 日、査読あり、神戸大学（兵庫県神戸市）、口頭発表
② 田中　ゆかり、「とびはね音調」の受けとめられ方－2012 全国聞き取りアンケート調査から－、近畿音声言語研究会、2014 年 3 月 1 日、査読あり、西宮市大学交流センター（兵庫県西宮市）、口頭発表
③ 田中　ゆかり、『現代日本語の動態研究』をふまえての課題―言語研究における「混合研究法の指針・手法の検討？―、国立国語研究所共同研究基幹型「現代日本語の動態（リーダー：相澤正夫）」研究発表会、2014 年 1 月 25 日、査読なし、国立国語研究所（東京都立川市）、口頭発表
④ TANAKA,Yukari、HAYASHI,Naoki、Edo and Tokyo as Seen in Edo/Tokyo WebGIS:Displaying Japanese Linguistic and Literary Materials with

Online Maps、Donald　Keen Center of Japanese Culture、2013 年 9 月 12 日、招待あり、Columbia University、ニューヨーク（アメリカ）、講演

⑤ TANAKA,Yukari、Patterns of Response to “Tokyo-esque” Pronunciation: Based on a Nationwide Survey of Tobihane Intonation、Urban Language Seminar 11、2013 年 8 月 18 日、査読あり、広島市文化交流会館（広島県広島市）、口頭発表

⑥ HAYASHI,Naoki 、 TANAKA,Yukari 、Patterns of Response to New Pronunciation in the Metropolitan Periphery:TobihaneIntonation and Compound-Word Accent 、 Urban Language Seminar 11、2013 年 8 月 18 日、査読あり、広島市文化交流会館（広島県広島市）、口頭発表

⑦ 田中　ゆかり、ネット系若者ことばの使用意識 ―首都圏の大学に通う学生とその親に対するアンケート調査結果から―、第 1 回アジア未来会議、2013 年 3 月 9 日、査読あり、Centara Grand at Central Plaza Ladprao Bangkok、バンコク（タイ）、口頭発表

⑧ 林　直樹、ネット系若者ことばの使用意識 ―広島県の大学に通う学生とその親に対するアンケート調査結果から―、第 1 回アジア未来会議、2013 年 3 月 9 日、査読あり、Centara Grand at Central Plaza Ladprao Bangkok、バンコク（タイ）、口頭発表

⑨ 高木　千恵、ネット関連若者ことばの使用意識―関西の大学に通う学生とその親に対するアンケート調査結果から―、第 1 回アジア未来会議、2013 年 3 月 9 日、査読あり、Centara Grand at Central Plaza Ladprao Bangkok、バンコク（タイ）、口頭発表

⑩ 田中　ゆかり、2012 年全国聞き取りアンケート調査の中間報告―「とびはね音調」関連項目を中心に―、国立国語研究所共同研究基幹型「現代日本語の動態（リーダー：相澤正夫）」研究発表会、2013 年 1 月 26 日、査読なし、国立国語研究所（東京都立川市）、口頭発表

⑪ 林　直樹、田中　ゆかり、地理的言語データの統合的分析 ―首都圏アクセントを事例とした試行 ―、日本語学会 2012 年度秋季大会、2012 年 11 月 4 日、査読あり、富山大学（富山県富山市）、ブース発表

⑫ 高木　千恵、方言からみる同意要求のタイプ、日本語文法学会第 13 回大会、2012 年 10 月 28 日、査読なし、名古屋大学（愛知県名古屋市）、パネルセッション

⑬ TANAKA,Yukari 、 MAEDA,Tadahiko 、Effects of Hometown and Age on the Membership to Types of Dialect Usage in Japanese、Urban Language Seminar 10、2012 年 8 月 19 日、査読あり、Utrecht University、ユトレヒト（オランダ）、口頭発表

⑭ HAYASHI,Naoki 、 TANAKA,Yukari 、Integrated Analysis of Linguistic Data Using WebGIS :A Pilot Study on Japanese Accents in the Tokyo Metropolitan Area、Urban Language Seminar 10、2012 年 8 月 19 日、査読あり、ユトレヒト（オランダ）、口頭発表

⑮ 林　直樹、田中　ゆかり、地理的言語データの統合的分析 ―首都圏形容詞アクセントを事例とした試行 ―、国立国語研究所共同研究プロジェクト（萌芽・発掘型）・プロジェクトリーダー：三井はるみ「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」共同研究発表会、2012 年 7 月 22 日、査読なし、日本大学文理学部（東京都世田谷区）、口頭発表

〔図書〕（計 3 件）

① 田中　ゆかり、林　直樹、明治書院、神奈川県のことば、2015 予定

② 高木　千恵、富山市教育委員会市民学習センター、地域方言の現在―ことばの地域差とその変容―、2014、40

③ 田中　ゆかり 他、三省堂、方言学入門、2013、143

〔その他成果物〕（計 1 件）

① 田中　ゆかり、 「下町ことば」「首都圏アクセントの動向」「山の手ことば」、日本語大事典上・下、2014、978-979・1040-1042、2041-2042、項目執筆

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0　件）

〔その他〕

登録制 Web 調査用サイト

「ことばの発音調査サイト」

http://maki.e-secure.co.jp/tobihane/

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　ゆかり（TANAKA, Yukari）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：４０３０５５０３

(2)研究分担者

高木　千恵（TAKAGI, Chie）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：５０４５４５９１

林　直樹（HAYASHI, Naoki）

日本大学・文理学部・助手

研究者番号：　７０７０７８６９

（平成 24 年度は研究協力者）